

# 本校『学園だより』の変遷と実状

## 第1報 変遷と編集について

曾田友紀子\*1・倉澤英夫\*2・山田達朗\*3・  
長坂明彦\*4・芳賀武\*5・大矢健一\*6・松岡保正\*7・  
小澤志朗\*8・大西浩次\*1・川口修一\*9・三尾敦\*10

### A Brief History of Nagano Kosen Public Relations Newsletter, “Gakuen Dayori”, and Its Image Today

#### 1st Report: History and Editing

Yukiko SODA, Hideo KURASAWA, Tatsuro YAMADA,  
Akihiko NAGASAKA, Takeshi HAGA, Ken'ichi OHYA, Yasumasa MATSUOKA,  
Shiro OZAWA, Kouji OHNISHI, Shuichi KAWAGUCHI, Atsushi MIO

キーワード：学園だより，広報誌，変遷，編集，メディア，学園だより編集委員会

## 1. ま え が き

本校の『学園だより』は発行号数から、全国の高専の中でも歴史的にかなり古い部類に入ろう。1971（昭和46）年に創刊号が発行され、昨年の平成11年には100号を達成している。この間発行当初から比較すると様々な変化をへて、判、文字とも大きくなりさらにカラー頁も一部導入され、読みやすく充実した内容になってきている。

パソコン等の普及に伴う編集システムの変化、あるいは種々のメディアの出現に伴い『学園だより』の在り方にも従来とは違った観点から考えるべき事があるのかもしれない。しかしやはり根本的なことからは、『学園だより』がどのような主目的をもって発行されるべきなのか、どのように関係者に評価されているのか、少し立ち止まって考えることが重要であろう。

そこでこの報告書ではまず、『学園だより』の時代時代での特徴と歴史的変遷をたどり、変化の背景などに迫りたい。その上で、現在どのような編集方針で、どのような方法で編集されているかを紹介したい。すなわち、過去と現在を紹介することにより、より望ましい『学園だより』の在り方を模索する一歩としたい。

## 2. 『学園だより』の変遷

### 2-1 草創期 一森本校長とともに

1971（昭和46）年7月1日に発行された『学園だより』第1号の巻頭は、「創刊にあたって」と題された森本校長のつぎのような文章ではじまっている。やや長くなるが紹介しておこう。

このたび「学園だより」を発行することになりました。おたがいに同じ学園におりながら他の部門での出来ごとや計画を知ることなく、またおたがいの考えや感想を述べ合う機会もなく暮しているというのが今の状態です。これでは学園において好ましい人間関係が育つわけもなく、一体感も生れないと思います。

われわれも例えば図書館センターの建設、その他もろもろの小さいことにせよ学校の考えなり計画を早く学生諸君にお知らせすべきであったと思います。ただいいわけになりますが今まではそのようなお知らせをする機関がなかった

\*1 一般科助教授  
\*2 機械工学科教授  
\*3 電気工学科教授  
\*4 機械工学科助教授  
\*5 電子制御工学科教授  
\*6 電子情報工学科講師  
\*7 環境都市工学科教授  
\*8 一般科教授  
\*9 学生課長  
\*10 技術室第一技術班  
原稿受付 2000年9月20日

わけです。

この「学園だより」はいまのところ年に何回発行するかどのような方針で行くか決っていません。

この部分から、昭和38年の学校創立以来の学生と学校とのパイプ役になるような広報誌が存在せず、そのために「学園だより」が創刊されたこと、当初は発行回数も定まっていなかったことが知られる。

『長野高専二十年の歩み』（昭和58年10月発行）によれば、「当時全国的に全共闘運動・学園騒動が流行しており、本校でも一部過激派学生により、学校当局へ種々な要求が突きつけられていた。それらの要求を一がいに斥けるのではなく、学校側としてできるだけ事情を説明し、意志を通じあおうというのも目的の一つであった」という。以下「歩み」と略称して、おりおり参考にさせていただくことを最初に申し述べておく。

編集は当初学生課長に任せられており、第1号は8頁、イラスト2つ、同窓会名古屋支部会の写真が最終頁に2枚というシンプルな体裁であった。また図書館だよりと昭和46年度の教官役職員名簿にそれぞれ1頁があてられていた。図書館関係の記事は、昭和59年1月『図書館ニュース』が創刊されるまで折に触れて各号に組み込まれている。第2号は昭和46年10月、第3号は昭和47年3月にいずれも6頁で発行された。が、昭和47年度は第4号が2月に発行されたのみ、昭和48年度は第5号が10月に第6号が昭和49年2月に発行されて年2回の発行だった。

昭和49年には教官7名（うち3名は主事）が編集委員に任命され、編集を担当するようになると同時にこの年度から3回発行になり、昭和50年度から、7月・12月・3月、つまり学生の長期休暇の前に発行されるようになった。また「森本校長は、自分の計画で『学園だより』を出しはじめたことでもあり、教官中の適任と思われる者を任命して良い『学園だより』を作るよう努力した」と前掲『歩み』は述べている。

昭和50年3月に発行された第9号以降、体裁も安定し、現在も受け継がれている題字の右下には4.5×7.5cm前後で学校に関連する写真が掲載され、最終頁には校内短信と編集後記が付されるようになった。現『学園だより』の校内短信の題字両脇のイラストは当時からはほとんど変化していない。頁数はおおむね6または8頁で、開校十周年特集号にあたる第5号のみ12頁で構成されている。昭和51年3月発行の第12号からは毎号8または10頁が定着しはじめたようである。

表1 学園だよりの内容 その1

(太字は特集)

号	発行年月日	ページ	おもな内容
1	昭和 46. 7. 1	8	創刊にあたって(校長)厚生補導について(学生主事)食堂直営(学生課長)図書館センター(同)
2	46.10. 1	6	滞独雑感(柳田)高専体育大会 保健室より
3	47. 3. 1	6	寮(主事)工嶺祭反省 修学旅行ロードレース
4	48. 2. 1	8	雑感(学生主事)学生生活についての統計(厚補委)
5	48.10.15	8	「高専信濃」の記事抄
6	49. 2. 1	8	十周年記念式式辞(校長)祝辞(文部大臣)
7	49. 7.15	8	オリエンテーション(4名)通学・下宿等調査(委員会)
8	50. 1.15	8	特集「高専生活の課題」工嶺祭 体育大会 修学旅行 電算センター便り 校内短信(以降、恒例となる)
9	50. 3. 7	8	就職 卒業研究 卒業生近況 在校生調査
10	50. 7.15	8	入学式校長訓辞 特集1・2年オリエンテーションから
11	50.12.10	8	就職 工嶺祭10年史
12	51. 3. 5	10	卓上旋盤「K-2」 高専卒業生の社会での活躍 卒業生座談会
13	51. 7.19	8	校長訓示 オリエンテーションをふりかえる
14	51.12.20	8	入社試験 工嶺祭
15	52. 3. 7	8	校長の新年あいさつ 卒業生大いに語る
16	52. 7.19	10	校長訓示 実力を問われる時代 柔道部山本君の事故 オリエンテーション特集編
17	52.12.20	8	卒業生の活躍 アンケートにみる高専生の意識
18	53. 3. 7	10	本校の教育改善 門出を祝して 高専生の意識(2)
19	53. 7.10	10	表紙史跡写真(以降恒例)夏休みを有意義に過ごすには リレーコラム(以降恒例)
20	53.12.20	10	私にとって青春とは 修学旅行と現場見学
21	54. 3. 6	10	卒業にあたって 就職状況
22	54. 7.16	10	高専全国大会 本校で開催決定 各部の目標等
23	54.12.20	10	第14同工嶺祭の意図したもの、残された問題 女子学生座談会
24	55. 3. 5	10	校長随筆 卒業研究
25	55. 7.12	10	入学式式辞 私の夏休み
26	55.12.20	10	全国高専大会終わる
27	56. 3. 4	10	卒業研究 卒業生便り
28	56. 7.13	10	校長随想 職場から見た高専
29	56.12.21	10	工嶺祭の成果と課題 アメリカ留学記 科学技術
30	57. 3. 5	10	卒業研究 就職進学の状況
31	57. 4.30	8	入学式式辞 入学にあたって 出身中学調べ 部紹介 卒業生進路状況
32	57. 7.14	10	校長随想 読書特集(アンケート、私の読んだ本等) 科学技術
33	57.12.20	10	工場見学 就職・進学
34	58. 3. 5	10	後輩へ先生へそして未来へ 20周年行事大綱
35	58. 4.26	8	新入生諸君へ(校長)入学にあたって 卒業生進路
36	58. 7.11	10	オリエンテーション 夏休みの過ごし方

文献1)より

内容面については表1を参照されたい。当初は取り上げる内容も各号毎に決められていなかったらしく、さまざまである。入学式や卒業式という取材の定石とも言い得る学校行事が必ずしも取り上げられているとは限らないところに、かえって新鮮味が感じられる。入学式の際の校長訓辞が掲載されたのは、昭和50年7月発行の第10号からである。それまでに校長の文章が掲載されたのは、前掲の創刊号「創刊にあたって」、昭和49年2月発行第6号の「開校十周年記念式典式辞」のみであり、寮や学校生活についての各主事の指導的発言、教官の雑感等学生との意思疎通をはかる記事や、就職状況や学校設備の充実にかかわる連絡がおもな内容を占め、学生の側からは工嶺祭、修学旅行、ロードレース等にかかわる意見や感想がよせられている。高専体育大会、臨海学校の記事は第2号から、工嶺祭、修学旅行、ロードレースの記事は第3号から紹介されている。

第2号、3号で紹介されてきた「卒業生だより」は、本校の卒業生との絆の強さを象徴するコラムであろう。他にも卒業を意識した記事として、昭和50年3月発行の第9号ははじめ卒業生の活躍ぶりを寄稿により紹介するなど、例年3月発行号は卒業生中心の紙面構成が継続するのに加えて、毎号のようにと卒業、進路特に就職にかかわる記事が満載されている。

2-2 成長期 一紙面・組織の充実一

1978(昭和53)年7月発行の第19号以降、表紙は現行とはほぼ同じ、題字の下に大きな写真(10.5×15cm)、その下に目次および小さめのスナップ写真というレイアウトが定着するようになり、本文は2頁以降に登場することとなった。この第19号から昭和55年3月発行の第24号までの表紙は、学校周辺の史跡で飾られている。また、昭和55年7月発行の第25号から昭和59年12月発行の第41号までは、本校と周囲の山々の姿が表紙を占めている。「歩み」はその間の事情を「とかく表紙が校長訓示などの固いものになり易かったので、イメージを柔らかくするのがねらいであった。なるべく、本校の校舎を入れた風景の写真を使うようにした」と伝える。昭和57年4月に発行された第31号以来4月にも発行されることとなった「学園だより」の表紙は、例年入学式風景が紹介されている。従来、7月発行の号に掲載されていた卒業式、校務分掌、行事予定等の記事が時節とずれていたため、4月に発行することになった。以後「学園だより」は4月、7月、12月、3月の年4回発行となり、主な内容も、特集・文化・スポーツ・校内短信というような、大体のパターンも固定

するようになっていった。

特筆すべき記事として、卒業生に贈る学校長の文章である「2+2は4である」が昭和55年3月発行の第24号に登場する。当時の林傳一郎校長は翌年3月発行の27号には「エスカレーターの力学」、昭和58年3月の第34号には「“熟慮”の尺度」、翌年3月発行の38号には「5年生の諸君へ」、翌年3月発行の42号には「5年生諸君へ」という文章を寄せている。卒業する5年生諸君にとって、校長から親しく寄せられた贈り物として卒業式の告辞とはまた異なる受けとめられ方をされていたのではあるまいか。以後3月発行の「学園だより」において同趣旨の文章を認めることができるのは、平成5年の第74号の「21世紀を担う信頼される技術者に」というタイトルの森肅校長の文章だけである。

また、昭和53年7月発行の第19号からは「リレー

表2 リレーコラム一覧

号	発行年月日	題名	執筆者
19	昭和 53. 7.10	コンピュータと音楽	堀内泰輔
20	53.12.20	禅と私	青木博夫
22	54. 7.16	弓と私	宮下重敬
23	54.12.20	シー・ハイル	服部秀人
24	55. 3. 5	音楽と私	伊東一典
25	55. 7.12	内地留学雑話	松岡保正
26	55.12.20	手作りの苦勞と喜び	藤原勝幸
27	56. 3. 4	日記より	松澤すみ
28	56. 7.13	私の学生時代	宮尾芳一
29	56.12.21	実験実習に思う	武井清水
30	57. 3. 5	南極行	清水賢二
32	57. 7.14	学生時代の思い出	中村博雄
33	57.12.20	全員集合のすすめ	鹿島健次
34	58. 3. 5	漱石の作品と私	宮寄 敬
36	58. 7.11	萩・津和野	片山修一
37	58.12.20	創立のころ	松本忠雄
38	59. 3. 5	「ゆり2号」の打ち上げに思う	金丸正弘
42	60. 3. 6	私が出会った先生	坂口正雄
45	60.12.20	今・思うこと	小枝淳一
46	61. 3. 4	ちっと一筆	内山泰一
54	63. 3. 2	転勤で今思うこと	駒澤春男
58	平成 元. 3. 2	二度とない青春	大岩宏明
61	元.12.18	自己との出会いは読書から	山本光夫
62	2. 3. 1	六十の手習い	小林義一
69	3.12.16	本校で感じたこと	大瀬絃興
76	5. 7.15	自分を大切にする	高島三男
78	6. 3. 1	セレンディビティ	松島久夫
80	6. 7.14	本校の若木を見て感じたこと	籍田浩二
84	7. 7.17	会計課と補正予算	古川勝行
88	8. 7.17	冬季オリンピック種目のレビューとの出会い	芳賀 武
97	10.12.17	中国とアメリカを旅して	畑 宏
101	11.12.14	英語に、はまった、私の人生	成澤紀夫

コラム」がはじまっている。教職員が自身の趣味や時事問題等について自由に語るという方針で、おおむね4分の1頁程度の文章を寄稿するという形式をとって、表2に示されているように第104号までの期間に32回掲載されている。表紙に紹介された史跡についての解説や「リレーコラム」等の記事は「文化」という枠組のなかで扱われ、教官、学生の別なく随想や趣味の紹介、外部講師に依頼した講演の概要等、人文科学全般にかかわるさまざまな記事が掲載された。昭和56年12月発行の第29号からは「科学・技術」というコラムも誕生し、本校教官の専門である研究の一端が紹介されるようになる。平成元年7月発行の第60号までに8回寄稿された「科学・技術」は、平成2年7月発行の第64号から「文化・科学・技術」と改称されるに至った。

続いて表3を参照されたい。昭和58年12月発行の第37号は、創立20周年記念号である。16頁の大増刊で用紙も平素のものとは異なる立派なもので、表紙はカラー写真で校舎全景を航空写真で紹介している。

同年10月1日「編集委員会規定」が制定され、3主事、教官若干名、庶務課長、学生課長が委員となり、「学園だより」、「学校要覧」の編集にあたることになった。もっとも、編集委員会自体は、昭和50年から教官7または8名、事務官3名で発足している。正式に編集委員長が発令されるようになったのは、昭和56年10月1日付けの小林計一郎委員長からである。昭和54年度からは教官10名、事務官3名の総勢13名に増員され、翌年には教官は11名に増えて総勢14名になり、昭和57年度には教官11名、事務官が4名に増えて総勢15名に、昭和62年度以降は教官12名、事務官4名にさらに技官1名が加わり総勢17名に増え、昭和63年度は教官11名で他は変わらない。平成元年には再び教官12名、事務官4名、技官1名の総勢17名、平成5年度は教官12名、事務官5名、技官2名で総勢19名と増え続けたが、平成6年度以降は教官12名、事務官5名、技官1名の総勢18名、平成9年度以降3主事は入らなくなって教官9名、事務官2名、技官1名の総勢11名と減員されている。

### 2-3 確立期 一広報誌としての性格一

表3にあるように、1985(昭和60)年7月に発行された第44号の特集記事は「長野高専総点検一三主事に聞く一」というもので、本校のかかえる「大問題」について忌憚のない意見を編集長が三主事に聞いている。勉学面における「持続性」のなさ、混合学級の弊害、生活面における道徳意識の問題、再出発した学生会への「自浄作用」の期待等、座談会の

表3 学園だよりの内容 その2

(\*は特集)

号	発行年月日	ページ	おもな内容
37	昭和 58.12.20	16	・写真でたどる長野高専の20年 20周年記念式典式辞
38	59. 3. 5	10	高専の思い出 卒研テーマ 20周年記念座談会
39	59. 4.26	8	入学式式辞 卒業生の進路
40	59. 7.12	10	・学生会再建なる 後輩たちへ
41	59.12.20	10	・工場および現場見学 ・クラス対抗ロードレース
42	60. 3. 6	10	5年生諸君へ(校長) 最終講義 卒業研究
43	60. 4.26	10	入学式校長訓辞 入学にあたって 卒業生の進路
44	60. 7.15	10	・長野高専総点検 先輩から後輩へ オリエンテーション
45	60.12.20	10	・工嶺祭をふりかえって 初めての九州修学旅行
46	61. 3. 4	10	・卒業を目の前にして 卒業研究
47	61. 4.21	10	入学式校長訓辞 各部紹介 卒業生の進路
48	61. 7.14	10	・長野高専の現実と希望 卒業生に聞く オリエンテーション
49	61.12.18	10	・修学旅行 就職・進路状況 工嶺祭
50	62. 3. 5	10	・卒業生を送る ・卒業研究 最終講義
51	62. 4.21	10	入学式校長訓辞 歓迎の辞 卒業生の進路
52	62. 7.13	10	・円高不況の中で長野高専生は今社会が今求めるもの
53	62.12.19	10	・厳しかった就職・進学戦線 雄風寮の改革進む 特別寄稿
54	63. 3. 2	10	・5年間の思い出 卒業研究 惜別のことは
55	63. 4.30	12	入学式校長訓辞 新入生像をさぐる(アンケート) 卒業生の進路
56	63. 7.18	10	・新任教官の見た長野高専 卒業生の話
57	63.12.20	12	・就職・進学戦線 OB 通信
58	平成 元. 3. 2	12	・電子情報工学科 卒業生の言葉 卒業研究
59	元. 4.26	10	・電子情報工学科第1期生を迎えて 本校設備の紹介 卒業生の進路
60	元. 7.13	12	・新しい時代の胎動 夏休みの過ごし方
61	元.12.18	12	・僕らが今求めるもの OB 通信 就職・進学状況
62	2. 3. 1	12	・よき高専生活のために 卒業研究 惜別の辞
63	2. 5.10	12	・人間性豊かな技術者を目指して 卒業生の進路
64	2. 7.13	10	・3主事語る 卒業生の話 オリエンテーション
65	2.12.17	14	・国際化の中の長野高専 工嶺祭 活躍の記録
66	3. 3.11	10	・我が青春 本年度の足跡 卒業研究
67	3. 4.25	12	・豊かな学園生活をめざして 卒業生の進路
68	3. 7.12	12	・そびえるインテリジェントビル 新主事語る 進路講演会
69	3.12.16	14	・新たな飛躍を目指して 工嶺祭 健闘プロコン・ロボコン
70	4. 3. 2	18	明日の高専を考える ・卒業を前に 卒業研究
71	4. 4.30	20	・新入生歓迎 長野高専マップ 卒業生の進路
72	4. 7.13	14	・長野高専30年り歩み 進路講演会
73	4.12.16	16	・栄光めざして 工嶺祭 就職・進学状況 オリエンテーション

文献2)より

形式で活発に討議されている。だが、このような校内の学生への問題提起を意識した記事は以後、掲載されていない。

その理由の一つとして、『学園だより』が中学校を意識した広報誌としての性格を強めていったことを指摘しておきたい。同昭和60年3月には毎年のように『学園だより』3月号で卒業する5年生に向けて寄稿していた林傳一郎校長と、昭和50年以降編集委員を務め、昭和56年10月1日に成立した編集委員会規定に基づき引き続き編集長の地位にあった小林計一郎教授がそろって定年退官している。同年3月発行の第42号の巻頭記事は林校長の5年間を振り返っての卒業生へ向けての文章であり、後述する「最終講義」に寄稿された教官4名の中にはもちろん、小林先生も含まれている。くしくも第44号の表紙には「これまで19回にわたって本校周辺の史跡めぐりの写真を連載してきましたが、今回から本校の部活動の様子を紹介していきたいと思います」とあり、サッカー部の練習風景が紹介されている。以後現在に至るまで4月発行の入学式、卒業式の写真を除いて部活動を中心とする学生諸君の姿を写真で紹介する方針は基本的に貫かれている。『学園だより』は、広報誌として新たな第一歩を踏み出したというべきかもしれない。

平成元年7月発行の第60号から表紙は毎号カラーとなった。平成5年7月発行の第76号の表紙はスライドからおこした写真が用いられ、一人の学生に焦点を合わせた新鮮な構図とともに画像の美しさが際立つ出色の出来となった。同年12月に発行された第77号は創立30周年記念号となり、表紙には校舎全景を収めた航空写真が用いられた。24頁という増刊号で、30年の歩みが概観できるように構成されている。

表3、4に示されてるように頁数は、昭和63年4月発行の第57号が12頁になってから次第に12頁が主流になり、平成2年12月発行の第65号では14頁、平成4年3月発行の第70号では18頁、同年4月発行の第71号では20頁を記録した。第71号は26字×47行、横2段組みであったものを、見易さの点から22字×42行に移行した号でもあった。平成6年7月発行の第80号から従来のB5版からA4版サイズに移行し、25字×48行、横2段組みに書式を変更した。

平成8年12月発行の第89号から、表紙ばかりでなく特集部分のカラー化がはじまり、平成11年7月に発行された第100号では全頁総カラーが実現された。32頁すべてがカラーであり、しかも表紙は本校の卒業生でプロの漫画家、田上勝久氏の御厚意によるイラストという豪華かつユニークな装丁であった。な

おこの第100号と平成9年4月に発行された第91号とはともに当該年度の国立大学等優秀広報誌表彰において全国高等専門学校のレイアウト部門最優秀賞を受賞した。

内容面で新しく加わった記事としては、学科や寮の新設に関連した特集記事が挙げられる。電子情報工学科の増設については、平成元年3月発行の第58号、同年4月発行の第59号、7月発行の第60号に連

表4 学園だよりの内容 その3

(\*は特集)

号	発行年月日	ページ	おもな内容
74	平成 5. 3. 1	14	卒業生に贈る言葉 *御卒業おめでとう 卒研テーマ 学位取得
75	5. 4. 26	20	入学式校長祝辞 *ようこそ31期生卒業式関連
76	5. 7. 15	14	*知的冒険のススメ 設備拡充 進路講演会
77	5. 12. 16	24	*長野高専過去10年間 技術展示会 工嶺祭 スポーツ 工場見学
78	6. 3. 1	16	*課外活動スペシャル プロコン
79	6. 4. 26	20	*32期生を迎えて 学科紹介 卒業式関連
80	6. 7. 14	12	*女子寮新築・男子寮増築 進路講演会 各種スポーツ大会
81	6. 12. 15	16	*留学生、長野高専 Jump up 修学旅行 工場見学 工嶺祭 各種大会
82	7. 3. 1	14	卒業生関連 *これが電子制御工学科 卒研テーマ
83	7. 5. 1	18	*新入生歓迎 卒業式関連
84	7. 7. 17	12	*高専生の進路 修学旅行 オリエンテーション スポーツ大会
85	7. 12. 18	12	*第30同工嶺祭 工場・現場見学 就職・進学状況 各種大会
86	8. 3. 1	12	第29期生の卒業にあたって *平成8年度に向けた学内の動き
87	8. 4. 25	16	*新入生歓迎 卒業式関連
88	8. 7. 17	12	*学内 LAN パワーアップ 進路講演会 修学旅行 オリエンテーション
89	8. 12. 17	12	*寮改修 工嶺祭 各種大会 進路状況
90	9. 3. 3	12	卒業生関連 *つくる喜びに魅せられて 卒研テーマ 学位取得
91	9. 4. 30	20	*歓迎 35期生 卒業式関連
92	9. 7. 16	16	*燃やせ青春 部活とともに 進路講演会 修学旅行 オリエンテーション
93	9. 12. 17	16	*ロボコン プロコン 中学生1日体験入学 実務訓練 工嶺祭
94	10. 3. 3	16	卒業生関連 *オリンピックボランティア 卒研テーマ
95	10. 4. 30	16	入学式 *それぞれのスタート 卒業式関連
96	10. 7. 14	12	*修学旅行 夏休み関連 オリエンテーション 各種大会
97	10. 12. 17	16	寮関係 科学の祭典・空き缶アート *長野高専生の活躍 工嶺祭
98	11. 3. 3	16	卒業生関連 *担任からクラスへ贈る言葉 卒研テーマ
99	11. 4. 28	16	*歓迎 35期新入生 卒業式関連
100	11. 7. 13	32	*祝学園だより100号 修学旅行 オリエンテーション スポーツ大会

続掲載され、平成3年7月発行の第68号ではインターネットビルと命名された電子情報工学科棟の内部まで特集が組まれて紹介されている。平成5年7月発行の第76号には学内LANと電算センターが紹介されている。平成7年3月発行の第82号では電子制御工学科について、その新校舎完成と併せて特集されている。寮関連では、平成6年7月発行の第80号で「女子寮新築・男子寮増築」という特集を組み、平成8年12月発行の第89号では3、4号館の改修を、平成11年12月発行の第101号では2号館の改修工事完成をそれぞれ紹介している。

学校生活に関連する記事としては他に、昭和59年4月発行の第39号からは本校に編入した留学生を、翌々年4月発行の第47号からは併せて高校からの編入生の紹介がある。また、平成元年から参加するようになったアイデア対決ロボット・コンテスト（東京工業大学森政弘名誉教授のグループとNHK主催）と平成2年度からはじまった高等専門学校協会連合会主催のプログラミング・コンテスト等も学生の活躍という点で取り上げるのに格好の機会を提供している。

時代の流れを見据えて学生を啓発する存在として、平成3年12月発行の第69号の特集「新たな飛躍を目指して」を執筆した前教務主事の山岸亘先生を紹介しておきたい。「大学編入への道」というタイトルの下に、先生はもはや高専も大学への編入を閉ざしている時代ではないことを指摘され、同年度の卒業生の大学への進学率21%、合格率80%を「素晴らしい飛躍である」とした。「大学編入」が少子化によってやがて到来する「サバイバル時代には高専の一つの魅力となる」ことを予言し、高専生の新たな進路の可能性を明らかにした山岸先生の寄稿の意味は大きい。

昭和60年3月発行の第42号からはじまる「最終講義」というコラムは、従来退職なさる教職員の紹介を記していただけであったのをご本人自身の原稿として掲載するようにしたものである。タイトルは適宜変更されているが、コラム自体は一つの伝統として現「学園だより」に受け継がれ、新任教官紹介と対をなしながら本校の歴史を辿るのに欠かせない貴

重な1頁をかたちづくっている。

なお、平成11年度から「編集委員会」は「学園だより編集委員会」と名称変更された。前年度から教官は委員長以下9名、事務官1名、技官1名、庶務は学生課担当という構成がとられている。

### 3. 『学園だより』の編集について

#### 3-1 『学園だより』の製作とその内容

##### (1) 発行時期、形式、編集スタッフ

まず編集委員は教官として委員長および各学科より各1名の5学科で5名、一般科より3名、事務より学生課長、ならびに技術室より1名が入り、総勢11名体制で運営している。庶務は学生課が担当している。

現在年4回発行しているが、1回の発行には教官4名が担当し、そこに写真撮影スタッフとして技術室の1名が加わっている（表5参照）。ただし現在委員長は毎号の発行に直接加わり、総括的に企画から発行まで携わっている。

具体的な発行時期、編集スタッフを今年度の予定を例に表5に掲げる。発行時期は前章でも述べたが、夏休み、冬休み、春休みの前、および新学期号として5月の大型連休前に発行している。表5の担当者◎印は担当号のチーフを示している。

紙面の大きさはA4判を用いている。頁は固定していないが、概ね12～16頁立てである。1頁の構成は横書きの2段組を原則とし、1段当たり25字の48行、したがって1頁当たり2400字になり、文字の大きさは9ポで明朝体を用いている。文字、写真ともほぼ白黒印刷であるが、現在表紙の他、2～4頁をカラー印刷とし、よりインパクトがあり臨場感が出るよう工夫している。

##### (2) 企画から発行までの流れ

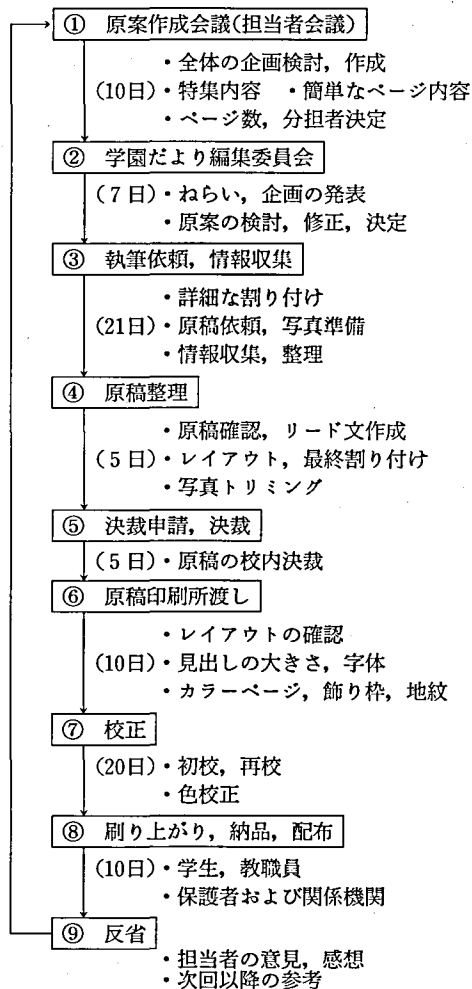
『学園だより』の内容を企画して、発行するまでには大きく分けて表6のようなフローチャートが描ける。

フローチャートに沿ってもう少し詳しく説明を加えよう。①の企画案作成が最も内容の良否を決めるといってもよいが、この部分は多分に発行号の担当チーフに負うところが大きい。すなわち、企画案作

表5 発行時期、スタッフ一例（平成12年度）

号数	発行予定日	編集委員会予定日	担当者（◎印はチーフ）
第104号	平12. 7.13（木）	平12. 5. 9（火）	◎松岡・小澤・曾田・長坂・三尾
第105号	平12.12.18（木）	平12. 9.29（金）	◎小澤・芳賀・大西・大矢・三尾
第106号	平13. 2.28（水）	平12.12.14（木）	◎芳賀・山田・大西・長坂・三尾
第107号	平13. 4.25（火）	平13. 2. 6（火）	◎山田・松岡・曾田・大矢・三尾

表6 編集のフローチャート



注) ( ) 内必要日数

成会議までにチーフは実質上、各担当者、委員長の話を聞きながら企画案の素案を練り、そのたたき台を作り上げることになる。

このたたき台をもとに、①で担当者が集まり素案の検討、修正を行いながらより細かな点、例えば原稿は依頼記事にするのか、どんな人に依頼するのが適当かなど大まかな内容が決められ、かつ担当分担が決定される。

段階②では編集委員会を開催し、各分担者が分担箇所でのねらい、簡単な割り付けの想定のもとに企画案を説明発表する。企画案に対し各委員の意見を参考に、より充実した内容になるよう修正、変更が加えられる。

この決定を受けて担当者は分担箇所全体を眺めかつ細かなレイアウトを考えながら、大きな見出し、写真のスペース、記事など1つ1つを割り付けていく。割り付けにしたがって文字数を算出し、段階③の執筆依頼を行う。この場合学校内だけでなく、学外の場合もあり、担当者は大変であるが企画のね

らいと内容をよく理解して頂き、原稿を依頼する。担当者の意図と執筆者の意識のずれ違いが生じないためにはこの手順が重要である。この後必要な写真を準備、あるいは担当者自身でリード文などまとめる記事を作り上げることになる。

④では担当者に委員長が加わり、すべての原稿、写真、図表等を持ちより、仕上げ状態を想定し割り付けに対応する原稿1つ1つを確認していく。同時に内容、字句の点検も行う。また時間的に間に合わない部分は割り付けのみを予定し、全体の編集をそのまま行う。その後、⑤で校長等の決裁をとる。

段階⑥は担当チーフおよび委員長が直接印刷業者に会い、レイアウトの確認、カラーページの指定、各見出しの大きさ、書体、地紋、カラーページの色の使い方などこまかな注文を出すと共に場合によっては印刷業者のアドバイスを受ける。特にレイアウト、見出し、カラーなどは読者を引き付け、見やすくなるように工夫していく。

段階⑦の校正は原則再校までである。初校は担当者全員ですべての頁に渡り、再校はチーフはすべての頁に渡り、その他の担当者は少なくとも担当部分を校正している。なお、現在は委員長も全てについて校正に加わっている。後は⑧の刷り上がり、納品、配布となる。配布は学生にクラス担任から1部、保護者には民間の宅配業者を通じて1部配送している。この区分け、配送に関しては学生係にお願いしている。また、保護者への配送は今年度から実施したもので、これに関してはさらに次報を参照されたい。

最後に発行後は担当者を主体に反省⑨を行い、次の編集委員会で報告し、以後の編集に役立てるようになっている。

(3) 主な内容

既に述べたとおり頁数は12~16頁で仕上げている。この中で、表紙には大きな写真と目次を入れている。写真の内容は前章でその変化を見た。また最後頁は校内短信欄を作り、主な学内行事、人事異動、部活動結果、各種資格取得者、海外渡航など様々な出来事を短く掲載し、記録性及び関係者への広報を行ってきた。

ここ何年か各号2~4頁に渡り、できるだけタイムリーな内容で特集を組んでいる。一つの話題に焦点を当て掘り下げた内容のものをねらった。その他、オリエンテーションといった学校行事、部活動などでの学生の活躍などに多くの紙面を割いてきた。中にはトピックス的な記事、あるいは教官の学位取得なども取り上げている。

逆に1年間のなかで定番となった記事も多くなっ

てきた。例を挙げれば、工嶺祭の記事、卒業、入学の記事、卒業生の進路先、記録性に重点を置いた運動部の春季北信高校総体・各種大会結果、卒業研究テーマ一覧表などである。これらは見方によって多くの情報を含んでおり、かつ記録性も強いため掲載について簡単に賛否を下し得るものではないが、マンネリにならないよう工夫と切り口を考える必要がある。

なお、以上に挙げた内容に関する区分は第2報のアンケート項目11を参照にされたい。

### 3-2 編集に当たっての留意点

#### (1) 編集方針

「学園だより」は、本校における学生、父母、教職員その他の関係者とのコミュニケーションを図ることを目的として発行される広報誌である。したがって、下記の方針で編集内容を検討する。

- ①本校の教育・研究の活動状況、結果がわかるような記事を選ぶ。
- ②本校の教育方針が学生・保護者・中学生などにわかるように、本校の責任者のビジョンあるいは教職員のオピニオンを適宜記事にする。
- ③本校の記録として後日利用できるもの。
- ④読者層（学生・保護者・教職員・中学生・その他）に適切な内容であって、読みやすい文章とレイアウトに心がける。
- ⑤広報誌としてふさわしい内容を選び、また用語の選択にも注意を払う。

#### (2) その他の留意点

##### (i) 原稿依頼について

- ①執筆を依頼する際は、取材の趣旨・書いてもらう内容を十分説明し、納得の上で引き受けてもらう。
- ②学園だよりが学外にも配布されることも考慮し、読者の誤解を招くことのない内容を依頼する。
- ③表題、氏名が制限文字数に含まれるか否かを明示する。
- ④原稿の受け取り日を明示する。
- ⑤学外で行われる行事の写真が必要なときは、担当者が編集委員会のカメラとフィルムを行事参加者に渡し、撮影を依頼する。
- ⑥外部の写真、図等を使用する場合は必ずその著作権所有者より使用許可をとること。

##### (ii) 原稿の校閲について

- ①依頼した原稿は、学生に読みやすい文章、漢字かな使いであるか確認する。
- ②改訂が必要な場合は、必ず執筆者の了解をとる。原稿ミスに関しても原則執筆者の了解をとる。

##### (iii) その他割り付けなど

- ①タイトル・リード文・本文等の区別が視覚でわかるように工夫する。
- ②イラスト・写真・アニメなどを利用し、できるだけ視覚にうったえる。
- ③全体に堅苦しさをなくし、親しみが持てるような内容、レイアウトになるよう工夫する。
- ④学生名が数多く載るように心がける。
- ⑤各号の反省事項を参考にする。

なお、この他に教職員の指名はフルネームとする、学生は「君」、「さん」、卒業生は「氏」、「さん」とするなど用語の使い方の統一性、校正のチェックポイントが、従来から徐々にマニュアル化されてきているが、ここでは細かな技術的な点は割愛する。

### 3-3 配布先と利用方法

「学園だより」の配布先の一覧表を表7に示す。

表7 配布先一覧

配布先	部数
学生	1000部
保護者	1000部
教職員	187部
全国高専	61部
中学校	414部
工業高校	17部
教育委員会	132部
文部省	9部
信州大学	5部
予備	175部
合計	3000部

教職員は本校にみえている非常勤講師約50部を含んでいる。また中学校は、県内195校、新潟県10校、山梨県2校で各校2部送っている。工業高校は県内の他隣県の新潟県2校である。教育委員会は市町村約120のほか、県の12部を含んでいる。

この他に適宜、本校を訪れた方、あるいは逆に企業を訪問した際などに利用している。

## 4. あとがき

本校で「学園だより」のように息が長く、かつ様々な意見と情報が盛り込まれた発行紙は他にみることはできない。この点からすると、「学園だより」の歴史はそのまま本校の歴史の一端と重複させることができる。時代と共に形式はもちろん記事の内容、取り上げ方にも変化があることを具体的に紹介した。

一方編集については過去の蓄積のなかから、かなりマニュアル化された手順が確立されてきており、効率的にできるようになってきている。同時に内容の充実に伴い、委員の仕事も増えていることは否定



できないだろう。さらに委員の数も削減傾向にある。今後どうあるべきかの若干の考察は次報で述べることにし、ここでは変遷と現状を示した。

最後に本稿を書くにあたり、前編集委員長である中村護光先生をはじめとして、今日までの委員長、編集委員の方々によりまとめられた委員会資料を一部参考にさせて頂きました。ここに感謝申し上げます。

## 参考文献

- 1) 「長野高専二十年の歩み」 長野工業高等専門学校  
昭和58年10月発行
- 2) 「長野高専三十年史」 長野工業高等専門学校 平成5年10月発行
- 3) 「出版編集技術」 上巻 日本エディタースクール  
出版部 1994年3月発行